

大岡昇平の表現

—— 孤独と死をめぐる ——

—

瀬古 確

「現代作家の表現」として、既に私は川端康成・堀辰雄などに就いて述べたが、ここに取挙げる大岡昇平の表現も亦これらに続くものであり、今後予定の数人の作家を終れば、「近代日本文学史」(白帝社より)と共に私の近代以降の文章史の粗案を成すものである。

大岡昇平は最初はスタンダール研究家として知られ、戦後その俘虜記によつて作家としての地位を確立したものである。

戦場ではいつも死と向い合っているようなもので、私も満州の戦争で之を体験した一人である。作者も俘虜記でいざ輸送船に乗つてしまうと、単なる「死」がどつかりと私の前に腰を下して動かないのに閉口した。と言つたり、

しかし死の観念は絶えず戻つて、生活のあらゆる瞬間に私を襲つた。とも言つている。そして死を前にしながら主人公の眼にした比島の自然は殊に美しかった。

到る処死の影を見ながら、私はこの植物が動物を圧倒している熱帯の風物を眼で貪った。私は死の前にこうした生の氾濫を見せてくれた運命に感謝した。

水を求めてさまよっているうち、川の大きな水溜りで四五匹の水牛に出会った。サンホセから荷物を載せて連れて来た水牛である。

水牛は私の顔をいぶかしげに眺めた。その一頭と私は暫く眼を見合せていた。その顔は見れば見るほど人間に似ていた。私は奇妙な混乱を感じた。水牛はてれたように顔をそむけ、一声鳴いて水からあがった。水がざぶざぶその大きな体からこぼれた。その水もやはり飲めない水である。

林に入つた道はまた先で川床に降りるだろうと思つて、その道を辿つて行くと川とは離れて了つて、草原に出た。渡渉点に行くには一旦上つて又下りて行かねばならない。

私は再び私の力を使い果していた。私は目的地の水がこれだけの労力に値するかどうかを疑つた。この水の減りようから判断すれば、その水もやはり干上つていいると思わねばならない。私はその林のへりに倒れた。そこで考えていたのは自殺することか、それとも渴えていたのか分明ではないとしながら、

確かなのは私が米兵が私の前に現れた場合を考え射つまいと思つたことである。と言つている。

私は生涯の最後の時を人間の血で汚したくないと思つた。

からであるが、「私の決意は意外に早く試練の機会を得た」のである。

谷の向うの高みで一つの声がし、別の声が比島人らしいアクセントで何か言うのが聞えた。声はそれきりしなくなり、叢を分けて歩く音だけがガサガサと鳴った。前を見ると一人の米兵であつた。その米兵に就いての細かな叙述が行われているばかりでなく、それに続いて撃たなかつたその時の自分の心理をあれこれと分析している。即ち

それは二十歳くらいの丈の高い若い米兵で、深い鉄兜の下で頬が赤かった。彼は銃を斜めに前方に支へ、全身で立つて、大股にゆつくりと、登山者の足取りで近づいて来た。私はその不要慎ぶつうしんに呆れてしまった。彼はその前方に一人の日本兵の潜む可能性につき、些かの懸念も持たないように見えた。谷の向うの兵士が何か叫んだ。こつちの兵士が短く答えた。「そつちはどうだい」「異状なし」とでも話し合つたのであろう。兵士はなおもゆつくり近づいて来た。私は異様な息苦しさを覚えた。私も兵士である。私は敏捷ではなかつたけれど、射撃は学生の時実弾射撃で良い成績を取つて以来、妙に自信を持つていた。いかに力を消耗しているとはいへ、私はこの私が先に発見し、全身を露出した敵を逸することはない。私の右手は自然に動いて銃の安全装置を外していた。

兵士は最初我々を隔てた距離の半分を越した。その時不意に右手山上の陣地で機銃の音が起つた。

彼は振り向いた。銃声はなお続いた。彼は立ち止り、暫くその音をはかるようにしてしたが、やがてゆるやかに向きをかえてその方へ歩き出した。そしてずんずん歩いて、忽ち私の視野から消えた。

とその時の息づまるような様子を余す所なく伝えている。

私の射たなかつたのは「果して」前に考えた時と同じく「射つ気はしなかつた」からである。

米兵の若さは「頬が赤かつた」と言われている所にも、戦場でありながらまるで「登山者」のような足取りで不要慎に近づいて来た所にもよく窺われるようである。しかも彼は全身を露出しこちらから先に発見せられている。その上「私」は学生時代からの射撃の名手である。「射つ気がしなかつた」のでなければ米兵の生命は甚だ覚束ない。

そして主人公はその後度々その行為に対して反省しており、それを細々と詳しく叙述しておるのであり、如何にこの事が「私」の関心事であつたかを物語っている。

まず私は自分のヒューマニテイに驚いた。

と言つては殺されるよりは殺すというシニスムを放棄させるものが、自分の生命の存続について希望を持つていなかったことにあるのは確かだと言つている。

しかし「死ぬから殺さない」と言う判断は「殺されるよりは殺す」に支えられて意味があるのであり、「自分が死ぬ」から導き出されるものは「殺しても殺さなくてもいい」であり、必ずしも「殺さない」とは限らないのである。そして「殺されるよりは殺す」をよく検討してみた結果、そこに「避け得るならば殺さない」という道德の含まれていることを発見した。そこで「私」はすぐ「殺さない」の方を選んだようである。

但し「殺すなかれ」とは人類の立法と共に存在するのを見れば、「それは各人の生存がその集団にとって有用」なためであり、戦場——ここでは集団の利害が衝突する——では「今日あらゆる宗教も殺すことを許している」のである。

このようにして「最初彼の姿を見た時、私は射つ気が起らなかつた」としてその「私」の心理を作者は縷々として述べて厭くことがない。

「私」は撃とうと思ひさえすれば撃てる相手を撃たなかつたのである。確かにその時の「私」の心理は深く探索するに値するものに違いない。

彼が谷の向うの兵士に答えた時の顔は蔷薇色で、白い皮膚との対照が美しく、「私」に感歎を与えずにはおかなかつた。

あれやこれやと探りを入れては「人類愛」から彼を撃たなかつたのではないにしても「私の個人的理由によつて彼を愛したために、射ちたくないと感じた」ものと信じている。しかし

私は銃を把りその安全装置を外した。私はやはり射とうとしたのであろうか。或いは顔に当ろうとする虫を見

て眼を閉じたのかも知れない。
と言う。

とにかく米兵は「私」を認めずに去り、「私」はその青年を助けたという「美行の陶醉」と共に一人そこに残されたのである。

機銃の音がひとしきりして止んだ後は「あたりは再び静かになり、私はまたひとり死と顔を突き合せて残された」のであった。

又渴を醫するために如何に彼が心を悩ましたかをも筆を極めて反復して之を述べることも忘れなかつた。水——塩の大切なことも別の所で述べている——が無くては生きられない。水が生きるために如何に必要であるかがよくわかる。

僚友がここまで来ることは私の想像に入り得なかつたから、銃声は私にとって米兵がなお私の外方にいること、従つて今私が脱出することは不可能なことを意味した。

同時に彼等がいつまでこの附近にいるかは不明であり、彼等の退去を待つならば、私はいつまでも水なしでここにいなければならないかわからないということの意味した。

私は遂に私が水を飲まずに死なねばならぬことを納得した。いずれ死ぬ私の生命は、あてもなくこの渴きと共に生きる苦しさに堪えて、それを延ばすに値しない。

と水を飲まず死を決意して手榴弾の信管についた安全栓を抜こうとしたけれども手では取れない——劍の先でそれをこじながら、彼はふとその針金が遂に取れないで死ねないのではないかと思つた。幾分それが取れなければいいと思つた彼の願いも空しく、彼の手を動かし続けて到頭それを取つてしまったのである。そして作者は

自殺者の心理が元来甚だ興味薄きものである。まして自殺し損つた者の心理の如き——それは結局自然に反し

た一事を行わんとする多少強い意志と、それに抗うあむか頗る正確な肉体の反応との結合に尽きている。そしてその成否を決定するのは多く全く偶然の外的条件である。

と言いながらも、猶

私が私の生命の終りを劃する一線を比較的気軽に越すことが出来たのは、やはりこの時私の肉体が病んでいたからであろう。

と言つては「信管を地上の石に打ち当てた。」が「信管は飛び、手榴弾は火を吹かず」彼は「いまいまして舌打ちして手榴弾を林の奥に投げ込んだ」で了つたと言う。

彼は第二の自殺の手段を思い、銃を取つて右足の靴を脱ぎその親指で引金を引こうとした——それは内地で教育中古兵から教わつたものであるが——が、半身を起した不安定の姿勢をいつまでも保つことが出来ず、横に倒れてしまつたので、「今やつちや失敗する」と思つて銃を横におき、右足に靴を穿くかわりに左足の靴も取つて再び横になつた。眠つたのか人事不省になつたかは明かでないが、腰に連続する衝撃を感じ、それが靴で蹴られているとわかると同時に一人の米兵が彼の右腕を取り、他の一人が銃口を近く差向けていた。彼はやつと俘虜になつたのである。

これが俘虜記の「捉まるまで」に描かれた彼の若い一人の米兵を撃たなかつた心理をあれやこれやと詳しく探求した前後の様様である。

ここではまだやや説明的であつて描くと言う点では或いは欠ける点が無いではない。しかしその委細を尽し、繰返し之を反芻している叙述には心理作家としての彼の面目を窺うに足るものがある。

俘虜記には又短文と長文との巧みな交用が見受けられる。例えば

夜になる。

に続いて

皆と同じ水色のピジャマが与えられ、蚊帳を吊つて貰つて寝につく。電灯はテント中央部の一つを残して消され、軽い患者が不寝番に立つて重症患者の便器の世話を見る。医務室のテントでは、宿直の米人の衛生兵がトランプを闘かわせている。発電所のモーターの音が高まり、それに交つて遠いテントから重い負傷者の呻く声が断続して聞える。(タクロバンの雨)

と言つたり、或いは

明くる日は雨になつた。雨はこぼれるように降り、テントの縁から流れ落ちて溝を満たし、急速に敷地後部の方へ動いて行つた。発電所のモーターの音は雨と雨滴れの音にまじつてかすかになり、唸るような地響を湿つた空氣の底に伝えて来た。俘虜はそれ等の物音と競うように、声を高めて話し合つていた。(同上)

なる文にあつて「明くる日は雨になつた」とそれ以下の文との間にも明かに短文と長文との利用が見られるようである。前の「夜になる」も後の「明くる日は雨になつた」もここで局面を転換させており、次にはそれぞれ夜とか雨の日の様子を細かく描いている。

短文と長文との巧みな利用は、よくその冗長に流れようとするのを救う結果となるばかりでなく、短文は又そこに扇の要のような効果をも發揮しているのである。或いは初に夜とか雨を持出してそこに焦点を合わせ、それぞれその後には夜とか雨の日の様子をこまかに描こうとするのである。

これと共に短文のみの重ね合せの用法も俘虜記に之を見ることが出来る。

私は空想した。米兵が現われる。進んで私を発見する。我々は銃を擬して向い合う。遂に相手は私がいつまでも撃たないのに瘦れを切らして撃つ。私は倒れる。相手は私の傍へ駆け寄る。(タクロバンの雨)

にあつて傍線の箇所は特に短文を重ねて用いる事によつてその緊張した場面とてきぱきした動作を描くのに甚だ有

効であつた。

しかも前後に短文を何度も重ねて用いた間にもあまり長くない文を重ねると共に「現れる」「発見する」「撃つ」「倒れる」「駈け寄る」と何れも動詞の終止形の使用によつてそれらの動作を眼の前に見る思いがする。

ここにもわれわれは作家の表現の魔杖に触れずにはおられない。

孤独は近代人の特質であるが、戦場における敗兵にあつては猶更である。俘虜記にも孤独は屢々作者によつて取上げられている。

例えば

眼路を限る丘並の左端に岬のように張り出した小高い頂上には、展望哨の小さなテントが、そこに人がいるかと思われるほど孤独な姿で雨に煙つている。(タクロバンの雨)

夜、狭い一人吊りの蚊帳の中で私は全く孤独である。(同上)

私は病み疲れ歩行の力を失つた孤独な兵士であり、既に自分の生命について希望を持っていない(同上)

これは私が孤独な敗兵であり、私の行為を自分で選択することが出来たからである。(同上)

彼らが私を見る眼はまず戦争初期、電車内で横文字の本を読む人を見る衆人の眼附に近かつたが、私はそういう眼の間で意識して術学的孤独の裡に閉じ籠つていた。(パロの陽)

後で収容所で隊を異にするにつれ、我々は益々疎遠になつた。彼もあの掌を射抜かれた兵士と同じく、昔の僚友とは誰とも付き合わず孤独に暮していた。(同上)

などそのいくつをも拾うことができる。

死と直面して孤独と戦わねばならないのが敗兵の運命であつた。

この孤独は「野火」にも継承せられている。即ち

操縦士は原色のスカーフを首に巻き、人形のように前方を向いたまま、不動で過ぎた。その孤独な様子が私のうちに一種の共感を呼び起した（楽園の思想）

の如く孤独は敵の操縦士にまでも認められて主人公の共感を呼んでいるのであるが、彼は「孤独な敗兵」であり、私は孤独であつた。恐ろしいほど孤独であつた。この孤独を抱いて、なぜ私は帰らねばならないのか。（銃）の如く「孤独な兵士の唯一の武器」を棄てたことを述べているのであるが、そこには孤独を二度も反復して用いているばかりではなく、三度目には「この孤独」と言つて二度目の「孤独」に連接することを忘れないのである。孤独は反復によつて強調せられているばかりでなく、二度目と三度目とをチェーン式に結び付けることによつて、その関聯を一層密接なものとしなければおかないのである。

泥の湿原を通り抜けようとして途中まで来て、後に引き返す気力のないことを知り、ままよ「殺されてもいい」「死ぬまでだ」と決心してみると

死の観念は、私に家に帰つたような気楽さを与えた。どこへ行つても、何をしてみても、行く手にきつとこれがあるところをみると、結局これが私の一番頼りになるものかも知れない。

私は不意に心が軽く、力が湧くように思つた。泥から足を抜く動作の一つ一つも、もはや私にはどうでもよい、任意のものと感じた。そして早く進んでいるような気がする。（光）

の如く「家に帰つたような気楽さ」を感じたのである。結局この孤独は死によつてのみ解決せられるが如くである。野火は敗兵としての孤独な主人公に取つてはそこに必ず比島人のいることを示し、野火は彼に迫る死の危険の象徴でもあつた。

林が切れた。川向うには依然として野火が見えた。いつかそれは二つになつて来た。麓の煙が空気の重さと争うように、早く勢い込んで騰るのに対し、丘の煙は細く高く、誇らかに騰つて、空の風と戯れるように、揺れ

て靡いて流れていた。この氣象学的常識に反した、異なる形の煙の一つの風景の中の共存は、奇妙な感覚を与えた。

丘の煙はおそらく牧草を焼く火であろうが、我々のいわゆる「狼煙」^{のろし}にかなり似ていた。しかし何の合図であろう。

私は焦立つた。右手の丘はますます迂回されつつあつた。女の背のような優美な側面は、いつか意外に厳しく狭い正面に変わり、三角の頂上から両足をふんばつたように、二つの小尾根を左右に投げ落していた。そしてそのあわいの小さな窪みに、肱掛椅子の形の玄武岩を支えていた。先の方の尾根を廻れば、病院のある谷間へ出るかも知れない。私は足を早めた。(野火)

と言つている所にも見られるように野火は彼に迫る危険を示すものであつた。ここにもわれわれは作者の短文(傍線で示す)と長文とを巧みに使用しているのを見ることができ、短文は長文を引締める役目を担つていようである。

夜は暗かつた。西空にかかつた細い月は、紐で繋がれたように、太陽の後を追つて沈んでいった。めいめい雨衣をかぶり、雑囊を枕に横になつた。強い光を放つ大きな螢が、谷間を貫く小さい流れに沿つて飛んで来て、あるいは地上二米の高さを、火箭のように早く真直ぐに飛び、あるいは立木の葉簇^{はむら}の輪郭をなぞつて、高く低く目まぐるしく飛んだ。そして果ては一本の木にかたまつて、その木をクリスマス・トリーのように輝かした。

(夜)

の如く熱帯らしい大螢の美しく飛びかう風景——これが戦場でなければどんなに楽しいであろうと思われる——を描くにあたつても「夜は暗かつた」と言う短文によつて筆を起しており、以下は暗い夜を高く低くめまぐるしく飛びかう大螢が詳しく描き出されてゆくのである。

野火には又教会堂にあつた敗兵の屍体を写して、

会堂の階段の前の地上にあつた数個の物を、私がそれまでに眼を投げたにもかかわらず、ついに認知しなかつた理由を考えてみると、この時私の意識が、いかに外界を映すという状態から遠かつたかがわかる。不安な侵入者たる私は、ただ私に警告するものしか、注意しなかつたのである。「物」と私は書いたが、人によつては「人間」と呼ぶかも知れない。いかにもそれはある意味では人間であつたが、しかしもう人間であることを止めた物体、つまり屍体であつた。

ことに彼らは屍体であることすでに永く、あらゆるその前身の形態を失つていた。彼の穿つた軍袴のみ、わずかに彼らの人間たりし時の痕跡であつたが、屍汁と泥で変色し、もはや人間の衣服の外観を止めていながつた。周囲の土と正確に同じ色をしていた。(物体)

の如く述べている所にも、よくその物を屍体として認めては、順次その露出した腕や背中とか——頭部(蜂にさされたように膨れ上つていた)とか——頭髮(膠で固めたように皮膚にへばりついていて)とかを細かに詳しく描こうと努めているのである。

ここにも何ら注意しなかつた所から、一度之を敗兵の屍体と認めるに至るまでの主人公の思考の跡を細かく写しているのを見るのである。必要とあれば筆を惜しまない作者の態度を見逃しえないのである。又

死者たちは笑っていた。もしこれが天上の笑いというものであれば、それは怖ろしい笑いである。

この時、痛い歓喜が頭の天辺から入つて来た。五寸釘のように、だんだん私の頭蓋を貫いて、脳底に達した。思い出した。彼らが笑っているのは、私が彼らを喰べなかつたからである。殺しはしたけれど、喰べなかつた。殺したのは戦争とか神とか偶然とか、私以外の力の結果であるが、たしかに私の意志では喰べなかつた。だから私はこうして彼らとともに、この死者の国で、黒い太陽を見ることができるのである。(死者の書)

と言っている所には「笑」とか「喰べなかつた」を何度も反復使用しているのを見るのであるが、これによつて巧みに前後を互に連接させており、言わばチェーン式用法とでも呼ばるべきものである。

短文の重ね合せとか短文と長文との交用と共にこのチェーン式も亦作者の好んだ構文の秘密と言えるであろう。

「俘虜記」にしても「野火」にしても、敗者としての男の孤独な心理を述べようとしたものであるが、「武蔵野夫人」にあつては男性ばかりでなく、女性を登場させ、しかもその主役を演ぜさせるまでに到つてゐる。

二

俘虜記や野火に屢々見受けられた孤独はこの武蔵野夫人に於いても父の死に遇つた主人公の道子を描くのに當つて再び

彼女は一人ぼつちと感じた。これから先この孤独に堪えて生きて行けるかどうか自信がなかつた。死という情況はとかく人の考えを誇張さすものであるが、彼女のこれまでの生活がもつぱら宮地老人の蔭の中で過されて来たのは事実である。（「はけ」の人々）

の如く採用せられている。或いは時にはこの小説の主人公と言つてもよい従弟の勉に就いても

ようやく爽やかな秋の空気の中に、水草を浮べて澱んだ水は、彼に「はけ」の池水の流れる音ときらめきを思い出させた。その黒い水の上を孤独な蜻蛉が低く飛ぶさまは、現在の彼の心の姿であるように思われた（別離）の如く自らを「孤独な蜻蛉」に比したりするのである。

道子も勉も共に孤独な人として描かれているのは俘虜記や野火の主人公と同様である。

この作では自然描写がふんだんに用いられており、時には人物が主人公なのか、自然が主人公なのかわからない場合さへあるのである。

この小説の背景は「はけ」と呼ばれる所で、野川と呼ばれる小川の流域であり、「野川はつまり古代多摩川が武蔵野

におき忘れた数多い名残川の一つである」と言われている。

道子の父が此処に住むようになったのは

彼は実際「はけ」が気に入ったのである。水があり日溜りになつてゐる所も気に入ったが、何よりも気に入つたのは富士が見えることであつた。

富士は見晴らす多摩の流域と相模野の向うに、岬のように突き出した丹沢山塊の上に小さく載つてゐた。その四季と天候による変貌は、彼のいつも見倦きぬ眺めであつた。樹木を愛した彼はもともと樹の多いこの地面に、さらにさまざまの珍しい観賞用の樹木を植えたが、泉と同じ高さに崖を切り開いて建てた家の傍では、樹をとさらに軒に近づけ、葉によつて富士の眺めが遮られないようにした（「はけ」の人々）の如く此処から眺められる富士を愛したからであつた。

勉は復員して後、今まで寄りつかかなかつた「はけ」の道子の家を訪ねることになるのであるが、作者はそこで人気のない横丁を曲ると、古い武蔵野の道が現われた。低い陸稻の揃つた間を黒い土が続いてゐた。その土の色は、恐らく彼が熱帯から帰つて懐しく思つた唯一のものであつた。彼は人間に絶望してゐたが、自然は愛してゐた。兵士は自然に接することが多い職業である。

茶木垣に沿い、栗林を抜けて、彼がようやくその畠中の道に倦きたころ「はけ」の斜面を蔽う喬木の群が目に入るところまで来た。

それは彼の幼時から見馴れた木立であつた。檜、杉、樺など、宮地老人の土地の背後を飾る樹樹は淋しい少年であつたころ、彼の最も懐しい映像であつた。ここへ来ることだけが、そのころ彼の楽しみであつたことを彼は思い出した。（復員者）

と言つてゐる。ここでは勉は「はけ」の自然を懐しむ人として——「兵士は自然に接することが多い職業である」

とは作者の註記する通りだとしても——描かれているのである。

「はけ」の前を流れる野川の水源に興味を持った勉はある日道子を誘つてその水源の探索を試みた。それに先立つて作者は

彼は自分の「はけ」の自然に対する愛を道子と頌ちたいと思つた。

と言つてゐる。道子に対する愛を表白することなくして水源の探索によつて代用させるものであつた。

杉木立を通り抜けると水が道を横切るのが繁くなつた。あるいは竹藪の蔭、石垣の根方などから突然流れ出て、道に平行して道に沿つて流れた。

流水の形と音のリズムに伴奏されて、二人の足は自然に合つた。(恋ヶ窪)

の如くこの水源探索は言わば二人の恋心の確めとも言えるようで、歩むにつれて「二人の足」の「自然に合つた」のも、更に神社の崖の上から聞える水音に注意していた道子はその水音を勉に注意する事によつて「初めて協力できたのに誇りを感じた」のも相寄る心の証であつた。

神社の上には、小径を登ると近くに往還があり、

一尺ほどの幅のコンクリートの溝が林の縁の人家に沿つてあり、水が忙しく道の方から走つて来た。斜面の始まるところで溝は十五度ばかりの角度で折れ、水は溝の側に弾ね返り、音を立てて滑り降りていた。行手の竹藪の底から轟く音が上つて来た。

溝は明らかに線路向うの玉川上水につながっており、すなわち野川に不自然に豊かな水量の印象を与える過剰の水が、結局多摩の本流であることを意味する。(同上)

に続いて勉は道子に「やつぱり僕の思つた通りだつた。上水から引いてるんだよ」と言つて、如何にも「満足げに笑つた」のだったが、作者はここで「道子はそうして喜ぶ勉を抱いてやりたい衝動を感じた」と記している。更に

二人はまた横の林を神社の横へ降り下の道へ出た。鳥居の傍の閉された掛茶屋を過ぎて少し行くと藪の切れ目に水が滝のように迸り、深い溝を掘つて道の下をくぐっていた。

ゆるい坂を上ると野が開けた。一つの流れが右へ斜面をゆるやかに退かせ、一つの道が降りて来た。道は野川を合流点の下で小橋を越え、対岸を遠く杉林の方へ向かっていた。

橋の上に立つた勉は、野川の水が依然として豊かなのに驚いていた。(同上)

と続いて水源探索の行を共にしているのであるが、勉はその時

何だ、水源は線路の向うらしいや

と笑つても道子の「笑顔を返すこともできなかつた」のは「彼女は結局自分に告白しようと欲しない一字のまわりを廻っていた」ためである。

川はしかし自然に細くなつて、ようやく底の泥を見せ始め、往還を一つ越えると、流域は細い水田となり川は斜面の雑木林に密着して流れ、一条の小道がそれに沿っていた。

線路の土手へ登ると向う側には意外に広い窪地が横たわり、水田が発達していた。右側を一つの支線の土手に限られた下は萱や葦の密生した湿地で、水が大きな池を湛えて溢れ、吸い込まれるように土管に向つて動いていた。これが水源であつた。(同上)

と二人はやつとここで水源を確かめることができたのである。水田で稲の苗床をいじつていた男に「ここはなんてところですか」と勉が訊くと「恋ヶ窪さ」とその男はぶつきら棒な返事をした。ここでやつと

道子の膝は力を失つた。

と言つたり、

恋こそ今まで彼女の避けていた言葉であつた。

とさきに「自分に告白しようと思わない一字」と言つたその一字をはつきりと認めさせたり、

彼女は自分がここに、つまり恋に捉えられたと思つた。

と記している。更につゞいて作者ははじめ

彼女は恋人を見た。

と勉を恋人として之に対させているのである。

ここでは全く水源の探索は結局道子に勉に対する恋の情を認めさせる結果となつている。

しかも作者は道子の恋の心をつとめて表面に出そうとはせず、あたかも水源の探索に全力を費しているが如くである。水源探索行に於ける詳細な自然の描写は隠水のように心の奥底を流れていた道子の勉に対する恋情をはつきり認めさせるのに効果を發揮したものであると言ふことができる。

夫の秋山が大野の妻富子と河口湖に出かけて颱風に閉じ込められていた頃、道子と勉も「狭山丘陵の懐ろの村山貯水池」に散歩に出かけて嵐のため帰れなくなつていた。

この狭山への旅行にも亦自然がふんだんに取入れられている。初めは「雨が頬に当つた」（狭山）位だったが、「随分降つて来た」ばかりでなく、ホテルの見える所まで行くのには「二人は肌まで濡れ」ねばならなかつた。しかも彼らの乗る多摩湖線は配電線の故障のため不通となつていた。

しかし嵐の過ぎ去ると共に二人の間の危機も遠ざかつて行つた。これ以上の危険を犯さないためにも、勉は道子の家を出なければならなかつたが、友人と同居することになつても勉はとかく道子のことを思いつゞけていた。

遠く、夕陽に牡丹色に染まつた雪の下に富士が見えた。山はすでに全山雪をかぶり、頂上をめぐつて、熔岩流の跡のみ黒く露出していた。

かつて自分の恋の不変の姿と映じたこの美しいコニーデ火山も、今は彼にその死を連想させた。

あの山がこんなに均整のとれた円錐形を示しているのは、火山が幼いからだ。時代を経れば、あれもやがて開析されて低くなり、蟹の這いつくばったような醜い岩山になってしまうであろう、と考えて勉は楽しまなかつた。(秋)

の如く富士の美しい姿にも一向に勉の心は楽しくならなかつた。勉が道子との誓(道子が呼ぶ時まで決して彼女を訪ねないと言う)を思いながらも、「何構うものか、あの人に知られなければいゝ」と思つて懐しいまゝに「はけ」に出かけてみた。

「はけ」も近く樹が多くなつて来た。みな紅葉していた。これは四年ビルマの緑ばかり見て来た彼が、初めて見る日本の秋であつた。その死滅して行く自然の中で、身内に高まつて行く歓喜の情が、彼に不思議であつた。とここでも「死滅して行く自然」と勉の「高まつて行く歓喜の情」とを交錯させている作者の心用意のほどを見るべきである。

道子はヴェランダにいた。彼女は珍しく古代縮緬で盛装していた。どこへ行くのかな、と勉は思った。

泉も秋は衰え、台所まで引いた竹の樋ひを充たすのがようやくやくらしく、水音は低かつた。オナガの去つたあとの梢には、ツグミとヒヨドリの啼き交わす音のみ響いた。(同上)

の如く道子も亦秋の庭の淋しさを前景として「前と同じように彼に背を向けて座つていた」のである。

何だろう、あの人がコップへ入れてる白い粒は。随分たくさんだ。サイダーを注いだ。大変な泡が出ている。掻き廻して、白く濁つたあれを飲んでどうしようというのだろう。何かの薬らしいが。(同上)

と勉の側から道子の服毒を描いている。

彼女が彼の隠れている枯れた山吹の叢ばかり眺めていたのは

道子は今が最後とかつて勉の現われたことのある泉の上を眺めていたのである。

が、彼には彼女が今サイダーに溶かした薬が何であるかを推測するだけの気転がなかったため、一度彼の心をかすめたことのある「共同の死」を実現し、「たとえひと時にもせよ、望外の幸福を味わう機会」を失ってしまったのであった。

以上の素描によつても、武蔵野夫人は勿論道子を主人公としているけれども、時には勉を主人公としていてもあり、時には作者は自然の描写にその全力を傾けているようでもある。

自然に親しむのは兵士のならわしであると作者は言うが、勉は「はけ」の自然を愛することによつて道子を愛していたとも言えるであろう。

川端康成の「古都」のように、主人公はむしろ京都の自然とか年中行事の陰に隠れてしまつたり、雙児の姉妹が屢々庭のみじの木に生えた可憐な二本の菫花によつて象徴されているほどではないにしても、猶自然の風景と人物の心情との屢々交錯して描かれていることは今まで眺めた通りである。

勉は「はけ」の自然を懐しむことによつてこの小説に登場しており、「はけ」の野川の水源の探索に誘われてはじめて、道子はその「恋ヶ窪」の名と共に、勉を恋人として認めずにはおられなかつた。狭山へ散歩に出掛けて嵐に遇つて帰れなくなつてしまつたのは、又よく二人の危機に相応しい背景となつている。嵐のおさまると共に、彼らの心も平静に戻りはしたものの、二人はますますその孤独に堪えねばならなくなり、秋山の不実な態度と共に秋の深まつた自然の死の容相の中で、われわれは道子の死を迎えねばならなかつたのである。

俘虜記や野火に屢々見られた短文と長文との交用はこゝでも行われており(……は長文の部分。)

勉は草に座つた。……

彼はつと身を起した。……

彼は立ち上つた。……

野に出た。……

(恋ヶ窪)

のような例を見ることができ。又さきにも引用した

何だろう、あの人がコップへ入れてる白い粒は、随分たくさんだ。サイダーを注いだ。大変な泡が出ている。掻き廻して、白く濁ったあれを飲んでどうしようというのだろう。何かの菓らしいが。(秋)

の如く短文を重ね合せたり、倒置したりしてせつぱつまつた彼女の動作を彼の側から描きながら、彼の考えの彼女の死に思い及ばなかつた事は「何かの菓らしいが」と中止のまゝで文を結んでしまつてそれ以上いつもの如くその考えを縷述しない所にも奇しくも現れる結果となつてゐる。

三

「武蔵野夫人」の道子は勉に取つて最後まで清純な恋人であり、その美しい「はげ」の風景と共に懐しく愛らし存在であつた。自然と人情が絡み合つて描かれていることも屢々例示した通りである。

「花影」に於ける葉子は道子とは全くちがつた型の女性であり、バーの女給として幾人もの男を迎えたり別れたりした。そこにあまり自然の描写の行われていないのは「武蔵野夫人」と対照的である。しかし「花影」と言う題名からして葉子を象徴させたものであり、いつもは小見出しを使つてゐるのにこの作では花影で一貫させてゐる所にも、花に寄せる作者の並々ならぬ愛情を見逃しえないのである。

松崎が葉子と別れて「二度と通ることはないかもしれない道」でふと目前の風景とはなんの関係もない吉野旅行——それも葉子と一緒にたつた一度の旅行であつたが——のことを思い出して

二人で吉野に籠ることはできなかつたし、桜の下で死ぬ風流を、持ち合せていながつた。花の下に立つて見上げると、空の青が透いて見えるような薄い脆い花卉である。

日は高く風は暖かく、地上に花の影が重なつて、揺れてゐた。

もし葉子が徒花あはななら、花そのものでないまでも、花影を踏めば満足だと、松崎はその空虚な坂道をながめながら考えた。

と述べている辺りは、「花の影」とか「花影」とかによつて花にまがう「縹緲きりょうよし」の葉子を描いて巧みである。

「桜の下で死ぬ風流」とは勿論西行の歌を踏まえてのことで、その前に

中の千本が満開なところで、大勢の酔客も気にならぬくらい美しかった。奥の西行庵まで行つて、降りて来た時は、風が落ち夕闇が迫つて来た。花見客の散つた後の閑散な山上の道は、花の匂いでむせるようだった。

と言つており、彼らが西行庵を訪ねたことに絲を引いていることはもとよりである。

しかし何と言つても武蔵野夫人との関聯は主人公の自殺に終る結末に於いて著しい。

花影にあつては主人公の死への行程を実に詳細を極めて描いて見せている。あたかも俘虜記になぜ敗兵の自分が不用意にまるで登山でもしているかのように現れた若い一米兵を射たなかつたか——射てば学生時代から射撃の名手であつた彼のこととて必ず敵を倒していたにちがいない——その時の自分の気持をあれやこれやと実にこまごまと描いているその態度と似ている。

それよりも更に武蔵野夫人に於いて道子が美しい死の身装いをして睡眠薬をコップに入れ、サイダーを注いでかき廻して従弟の勉に向かつて最後の別れをしている所——そこにはたまたま隠れて様子を見に行つた当の勉が實際いたのだが——まで示している。更に富子が勉のアパートへ行くのを確かめて急に彼女を追うことを止めて帰つて来た秋山の発見したものは、道子の服毒後盛装したまゝ寝ている姿であつた。

すぐ近くの大野のつれて来てくれた医師は

もう吐かしても駄目だろうな。しかし大抵大丈夫ですよ。

と言つてくれたり、両腿にリンゲルを打ち、強心剤を注射しては

これで一通りの手当てはすみしました。四五時間したら、うわ言をいうかも知れませんが、そしたら大丈夫です。朝また来て見ます

と言つて帰つて行つた。大野も

じゃ、僕は一旦帰るぜ、君一人で看病し給え。これから罰を受けるんだよ、君は。

と言つて帰つて行つた。大分たつてから秋山は道子の呻くような、笑うような音を発するのを聞いて、「鬼哭」というものがあれば、これだと思つた。

明け方近く、人間の声が道子の口から出た。泣く声であつた。次に彼女は「トムちゃん」と勉を彼の幼名で呼んだ。それから言ううわ言はすべて勉についてのものであつた。

「苦しい苦しい」と訴える声を最後に道子は再び蘇生することは出来なかつた。

大野は泣いて道子を呼ぶように

ひどい人だ、あんたは。自分で勝手に死ぬなんて。自分だけじゃない、あんたを愛している多勢の人を殺すことだと思わないんですか

と言つてその死を悲しんでいる。

これに反し夫の秋山は彼女の「助けて」と最後の言葉を聞いてさえも——彼女との最後の別のこの時になつてもまだ——道子は勉のために死ぬのだと確信し、自分が棄てたためだとは少しも気がつかないのである。

作者の言をまつまでもなく、スタンダールを売物にした「この学校教師は、いつまでも人生の外にいた」非情の人間であつた。

花影の葉子の死に就いてここに私は詳しく述べる余裕を持たないが、たゞここに附言したいのは同じ死の場面を描きながら花影の場合は「ずっと前から、支度はすんでいた」のであり、その直前にも周到の用意を怠らなかつた

ばかりでなく、直接野方の近づかなくなってしまった原因を作った高島をさえ何ら恨むこともなく、洗張りに出した冬物の戻つて来るのや、バー・クララの同僚から借りたままになつている本を返すことから、一寸ばかりになつてしまつている蠟燭を捨てることまで忘れていないのである。

てつに宛てて枕許へおく遺書も考えてのことであり、急用があると言つても、てつの東京へ着くのは一日二日後のことと計算の上鍵も発送しているのである。二日ばかりで部屋を整頓して、台所には大根の尻つぽ一つ残らないように、塩や砂糖の残りまで捨てておいた。それからゆつくり一眠りしてお風呂に行き、部屋の中をもう一度見渡して乱れがないかをたしかめた。

もう電灯をつけなければ手許が見えなくなつていたので、失敗するのを恐れて朝明るくなつてからにした。窓が明るくなつてから鏡の前でもう一度顔を直し、枕元の薬へ手を延し、少しずつ、急いで飲んで行つた。

花影では一度

高島も清水も来なくなつていた。一週間の間、誰も葉子に近づかなかつた。

そして野方は花を届けさせただけで、棺の前へはあらわれなかつたから、眞実は誰も知らない。と言つて最後を結びながら、又別に節を改めて

ずつと前から、支度はすんでいたのである。

から書き始めて、葉子の死を詳しく描いているのであつて、こゝにも武蔵野夫人とは違つた作者の構成を見逃しえないであろう。

同じ主人公の死を描くのにも、武蔵野夫人ではその場面を勉をはじめ秋山や大野に見られながら死んで行く様を写し、花影にあつては踏みにじられて消えてゆく徒花に相応しく、周到的な注意と計算のもとに、その死は計画せられ実行せられているのである。又武蔵野夫人では時間的経過のまにまに、その大団円が物語られているのに、花影

にあつては、一旦葉子の死について述べて、どうして彼女が死んだか「真実は誰も知らない」と結んでおきながら、再び彼女の注意深い計画のもとに実行せられた死にいたる場面を精彩な筆致で描くことを忘れないのである。

俘虜記から野火、武蔵野夫人から花影へと作者は常に登場人物の孤独と死とを取扱いながら、それぞれその共通面と異質面とを描いていることは以上縷述した通りである。

私は作者の主題をめぐつて些かその表現の特質を考察しようとしたものである。（昭和四十六年一月二十二日稿）